都市における思春期年代の居場所と公園の意味 －多世代共生の地域コミュニティ再生に向けて

I-basho of adolescents in the city and the meaning of parks: Towards the regeneration of multi-generational local communities

萩原建次郎　*Kenjiro HAGIWARA*
駒澤大学総合教育研究部

1．思春期年代から見た公園

令和３年度に総務省行政評価局からの委託を受けて，筆者は都市部に住む小学校５年生から中学校２年生（10 歳から 14 歳）までの児童・生徒を対象に公園利用実態調査（以下，公園調査）を実施した[1)]。そこから見えてきたのは，公園がこの年代（以下，「思春期年代」と表記する）にとって身近に地域のまなざしを感じる場所であり，地域課題・生活課題をリアルに感じている場であることであった。

公園は他の子どもの遊び場調査や放課後の居場所調査などでも，子どもたちが過ごす場として上位に来ている[2)]。今回の公園調査においても，公園は自宅，塾・習い事に次いで３番目に位置する重要な場所であることが確認された。しかし，思春期年代の視点に立てば，公園は窮屈な思いで過ごせざるを得ない状況にあることも今回の調査から見えてきた。それにもかかわらず，多くの思春期年代が「誰もが楽しく自由に過ごせる場であってほしい」と願っていることもわかった。

そこで本稿では公園調査を手掛かりに，思春期年代から見た公園の意義や課題は何か，公園に対するニーズや思いがどこにあるのかを明らかにしたい。それらをふまえ，思春期年代にとっても居場所であるために，近隣住民や他の利用者と共にどうあったらよいのか，その運用ルールも含めて検討したい。

2．放課後の過ごし方についての思春期年代の願いと公園の役割

思春期年代は放課後をどのように過ごしたいのだろうか。小学校全学年約 12500 人とその保護者約 9000 人を対象とした「神奈川県における放課後の子どもの居場所づくりに向けた実態調査研究」を手掛かりにみてみよう[3)]。

小学校高学年生が「放課後の時間にやってみたいこと」の上位３つを挙げると，一番多いのが「友だちと一緒に遊ぶ」（89%），二番目が「運動やスポーツをする」（71%），三番目が「本や漫画を読む」（57%）である。一方，保護者が「放課後の時間にさせたいこと」においては一番目が「友だちと一緒に遊ぶ」（97%），二番目が「運動やスポーツをする」（96%），三番目が「勉強をする」と「おつかいなど，家のお手伝いをする」（同率 84%）である。ここから**「友だちと一緒に遊ぶこと」「身体を動かして遊ぶこと」が子どもも保護者も一致したニーズとして高い割合を占めている**ことがわかる。

一方，実態として小学校高学年が放課後過ごしている場所は，一番多いのが自宅（79%），二番目が塾や習い事（47%），三番目が公園・空き地・広場（43%）であり，上記の子どもや保護者の願望と実態とでは大きな隔たりがある。実際に，放課後がつまらないと感じている児童のほとんど（85%）が自宅で過ごしており，友だちの家で過ごす割合（24%）も，公園・広場・空き地といった外で過ごす割合も少ない（22.8%）。逆に放課後が楽しいと感じている児童は，友だちの家で過ごす割合（42.6%）も，公園・広場・空き地の割合（44.8%）も倍近くになっている。

ここからわかるのは，**思春期年代の放課後の Well-being（楽しさや幸福感）を決めるのは，友だちとの交流と外遊び環境の質量に大きくかかわっており，友だちの家と共に，公園・広場・空き地がそれらを満たす重要な役割を持っている**ことである。

3．思春期年代にとっての公園の意義と課題

では思春期年代にとって公園はどのような意味を含んでいる場なのだろうか。また冒頭の述べたように窮屈な思いはどこから来るのか。今回の公園調査をもとに，さらに詳しく見ていくことにしよう。

（1）思春期年代にとっての公園の意義

（i）中学生にとっても友だちと過ごす重要な居場所

先に述べたように，思春期年代は頻度高く公園で過ごしている。とりわけ部活動で忙しい中学生であっても２割以

上（23.5%）は公園で過ごすと回答し，休日となると３割の中学生が公園で過ごすと回答している。これは休日の小学生と同水準である。

また，公園で誰と過ごすかという複数選択型の質問に対しても，小中学生ともに９割が「友だち」と答え，「一人」と答えたのは２割弱であった。これは前章で述べた**「友だちと外で思い切り身体を動かしたい，遊びたい」という彼らの思いからすれば，たまに一人で過ごしながらも，放課後に友だちと自由に過ごす重要な居場所である。**

（ii）多様な他者や自然と出会い交流が生まれる Well-being な場

思春期年代は友だちの他に，兄弟姉妹，親や祖父母らと共に公園で過ごしている。そこでは「遊具での遊び」「キャッチボール」「鬼ごっこ」「散歩」「勉強」「凧あげ」「ランニング」「楽器の練習」「電子ゲーム」「木登り」「砂遊び」「泥だんごづくり」「ボートこぎ」「釣り」「登校時の待ち合わせ」など様々な過ごし方，使い方をしている。近場の公園であれば，近所の年下の子どもたちとも遊び，近所の顔見知りの大人とも言葉を交わす。少し遠くにある大きな公園で野球やサッカーをしたり，大きな遊具で遊んだりもする。

また，散歩やランニングなどもしながら，木陰の心地よさ，木々のあいだを通り抜ける風の音など，自然の心地よさや清らかさにも心寄せている姿が明らかとなった。動物とも触れ合うことを楽しんだりもし，公園で安息を得たり，今ここに生きていることの充足感を得たりしている。

このように公園では，**思春期年代は自発的自律的に様々な活動とさりげない体験や経験を重ね，心地よい緊張とゆるみのなかで多様な他者・自然との交流とコミュニケーションを取り，生の充足感を得たりしている。**それは意図的計画的に人間形成に介入する教育空間や，成果と効率重視の機能空間，サービス提供中心の消費空間とは異なる，**無意図的で無定形的，偶発的で流動的な意味空間であり，生命性と存在性が満ちる空間である。**

（iii）状況に応じた柔軟な住み分けと譲り合いで成立する公益の場

思春期年代は公園で多様な過ごし方をしながら，小さな子どもが来れば，ボールが当たらないように離れたり，別な公園へ移動したり，砂場で幼児が自分のおもちゃを使おうとすれば，戸惑いながら貸してあげたりし，状況に応じた柔軟な住み分けと譲り合いもしている。こうした状況に応じた住み分けについては公園観察調査や近隣住民へのヒアリングでも確認された。ある近隣住民も「自分もかつては公園や道路からはみだして野球やサッカーをやったりしていたが，小さな子連れの親子がくれば当たらないように離れたり，道路も人や車が来ないかちゃんと気にしていた」という。その意味で，**公園は思春期年代同士，他世代・異年齢と共存する公益の場にもなっている。**

（2）思春期年代にとってのリアルな地域課題・生活課題としての公園

思春期年代にとって過ごしにくさを感じる公園はどのようなものなのだろうか。アンケートで「過ごしにくい」と答えた割合は２割弱であるが，全体の３割を占めた「どちらでもない」という回答の中には，「過ごしやすいときもあれば，そうでないときもある」という意味での回答もあり，そこには一時的な問題が潜んでいる可能性がある。そのことも留意した上で，「過ごしにくい」と回答した理由（自由記述）を見ていきたい。

（i）思春期年代へのクレームと公園利用者・近隣住民との関係性

自由記述では「公園のおばちゃんがガミガミうるさくてよく遊べない」「ボール遊びしていいと書かれているのに近所のおばさんにボール遊びするなといわれた」「おばちゃんが監視していてボール遊びができない」「カードゲームをしていたら，幼児の親の方に『公園はみんなの場所だからどいて』と言われました。みんなの場所なのに，私たちがどかないといけない事に過ごしづらいと感じました。」といった近隣住民や大人の利用者からのクレーム，一方的なルールの押し付けが挙げられている。

そのほかに「公園が狭い」といった物理的な問題，「木で周りが見えなくて暗い」「虫が多い」「トイレが汚い」「ゴミや犬の糞が落ちていて不衛生」といった公園環境管理の問題，「変な人がいる」「危なそうな大人がいる」「不審者がいる」といった不審者情報が理由として多く挙げられている。

このように見ると，物理的な問題や公園環境管理問題は行政側である程度改善可能な範囲であるが，不審者問題や近隣・利用者からのクレーム等については，思春期年代と他の公園ステイクホルダーとの関係性の問題が含まれていることがわかる。そこからは，体格も体力も大人に近づきつつある**「思春期年代」という存在に対しての大人のまなざしや，近隣住民と思春期年代との関係性，地域住民同士のつながりの問題が見えてくる。**

（ii）公園ルールによるボール遊びの制約

もう一つ，公園の過ごしにくさを生み出しているものがある。それは公園の利用ルールの問題である。近隣住民からのクレームに付随して多いのが「ボール遊びができない」という声と「ルールが厳しすぎてつまらない」といった声である。これは「過ごしにくい」という回答の中で３割を超えている。

このボール遊びの制約の問題について，東京都内では区ごとに公園統一ルールを定めており，幼児が使う柔らかいボールは使用可能だが，硬いサッカーボールや野球ボールなどは使用禁止となっている。ただし，どこまでのボール

がだめなのかは明示されておらず，調査した東京都板橋区の場合，統一看板では「危険なボール遊び禁止」とだけ掲示されている。

一方，「ボール広場」という形で防球ネットやフェンスを張って，キャッチボールやバスケット，ミニサッカー程度ができる公園は，全 395 箇所中 15 箇所のみである。比較として都内大田区の場合も全 557 箇所中 20 箇所にとどまる。

思春期年代にとってすれば，どこまでが「危険」であるかは主観的なものであるため，「これくらいのボール遊びなら大丈夫」と思ってしていても，周囲の大人（例えば乳幼児連れの親子など）からは「危ない」と判断されて，禁止されてしまうことは想像に難くない。こうして**ボール遊びの制限問題でも思春期年代と他の公園ステイクホルダーとの関係性の問題に突き当たる**のである。

4．公園運営とルール決定過程に思春期年代の意見を反映させる必要性と必然性

（1）思春期年代の共生感覚と公益的思考

公園のルールについては，多くの思春期年代からボール遊びの制約をめぐって，改善してほしいという声が集まっていることは紹介した。他にも自転車の乗り入れや花火，犬の散歩などについて規制の在り方を再検討してほしいという声があがっている。

そこで今回の公園調査ではアンケートを通して「公園の禁止事項や使い方は主に区の公園管理事務所や町内会の大人によって決めていますが，あなたなら公園のルールをどのように決めたいですか。ぜひ意見や思いを聞かせてください。」と問いかけ，彼らの思いを自由に書いてもらった。

そこでの回答内容の内訳を整理してみると①ルールを決める方法をめぐっての回答が 535 件。②公園全体をどのようなルールにすればよいかの提案が 111 件。③個別ルール（ボールの使用，自転車乗り入れ，喫煙，花火など）への意見が 538 件。④「無条件に自由」と回答したのが 10 件。⑤「わからない」「どうでもいい」と回答したのが 10 件。⑥その他 88 件であった。

回答内訳①では，公園利用者・関係者の意見を聞くことや思春期年代も交えて話し合うことを挙げたのが 468 件であった。これは①の回答総数の 9 割を占めており，自分たちだけで決めるといった回答は 1 件のみであった。回答内訳②の公園全体のルールをめぐっての意見も上記の分析と共通し，「みんなが不満なく安心してすごせるように決めたい」「公園を利用する全ての人の立場になって考える。」「その公園を，どの年代がよく使うかどうか（赤ちゃん，小・中学生等）公園の状態（を見て決める）」「近くに家があるか，道路があるか，などでルールを決める。町の人の意見を参考にしていって少しずつルールを調節する」といった回答が多く寄せられた。

また回答内訳③の個別具体的なルールの在り方を見ても，ボール遊びに関して 273 件と突出して多いが，その内容を見ると，そのほとんどがどうしたら他世代・異年齢と共存して公園を楽しく，そして互いができるだけ自由に過ごせるのか，という観点から考えていることが明らかとなった。

例えば「大きめの速いボールはだめでドッヂボールぐらいのボールなら良い。（遊具は園児用と小学生用で分ける）」「ボール遊びは，決められた場所ならば可とする。小さい子どもと，中学生以上の遊ぶ場を分ける」「その地域に犬を飼っている人が多かったら犬の散歩を認める公園を多くするなど，地域にあったルールを決める」「菓子のゴミをきちんともってかえること。ペットの糞尿は飼い主が処分すること。遊具の独占をしないこと。各個人の荷物をしっかりもつこと。」といったように，自分たちだけの利益ではない，周囲のこと，他の利用者層にも配慮した意見を寄せている。

つまり，**多くの思春期年代は，自分だけの利益を考えているのではなく，「みんながすごしやすい公園にしたい」という，他者との共生と公益的な視点から考えていることがわかったのである**。このことは，**とりわけ小学校高学年以上であれば，大人と共に話し合えるだけの構えがあることを示している**ともいえるだろう。

（2）公園運営とルール決定への思春期年代の参画

これらの結果を踏まえると，**公園運営やルール決定には，思春期年代の意見を反映させる仕組みが必要という結論に至る**。先にみたように中学生も公園利用の重要なステイクホルダーである以上，彼らの意見参加や参画は欠かせない視点である。

例えば，日ごろの公園の手入れを小中学生と行いながら，公園ルールについて一緒に考え，行政や町会に提言していくことも考えられる。また，学校を通して今回のような公園利用アンケートを自治体の公園関係部局が定期的継続的（例えば 2 ～ 3 年に一度）に実施する。自治体が設置する公園運営に関する審議会やそのワーキンググループに思春期年代も入れる。あるいは地域ごとに小学校高学年から中学生もメンバーに含めた地域公園運営協議会をつくるなども考えられるだろう。

5．多世代共生の地域コミュニティ再生に向けて

（1）思春期年代にとっての公園問題は地域コミュニティ再生の問題

ところで，今回の公園調査で明らかとなったのは，思春期年代も含むさまざまな利用者にとって使いやすい公園になるか否かは，近隣住民，周辺環境との関係性に大きく依存するということであった。

調査地域のなかには，近隣住民・町会が子ども・若者を見守り，住民からのクレームも町会と行政とで上手く調整しながら彼らの地域の居場所を維持している事例もあった。コミュニティ施設が隣接する公園では，公園前の駄菓子屋のおじさんや近所に住む町会・自治会関係者が思春期年代を見守り，コミュニティ施設職員を通して行政側と地域住民との調整役にもなっていた。

その意味で，同世代・多世代間のつながりが衰弱した都市部の地域に必要なことは，思春期年代にも寄り添いつつ，近隣住民の声との調整役にもなれる大人の発掘や大人と思春期年代の顔のつながりを再構築しながら，あらためて「地域の大切な子ども・若者たち」という意識を育むことだと考えられる。つまり，**思春期年代の成育環境・外遊び環境としての公園を再生することは，「多世代間の顔の見えるつながりと信頼・寛容のネットワークを育む」という地域コミュニティの再構築そのものである**ことに気づかされるのである。

（2）顔の見えるつながりと世代間の信頼と寛容の関係を育むために

では，そうした顔の見えるつながりと世代間の信頼と寛容の関係を育むにはどうすればよいのか。最後に，その方策と取り組むべき視点を提言して終えたい。

その具体的方策は，地域の実情に応じて異なりながらも，さまざまなアイディアが考えられる。筆者が大学で担当している社会教育主事講座を受講している学生たちにもアイディアを募ったところ，以下のようなものが集まった。（以下引用文の下線部分は筆者による）

・挨拶運動や交流会，遠足などをして，地域で子どもたちを温かく見守る雰囲気を作る。私の地元は，高齢者の方が一緒に学校の遠足に参加したり，朝，交通安全の帽子をかぶって道に立っていてくれたり，お餅や蕎麦の作り方を教えに来てくれたりしました。私の祖父は，朝児童と話をすることが毎日の楽しみになっているようです。

・地域 NPO が中学校の生徒とともに行っている，高齢者の救助をするための防災訓練に，近隣の高齢住民の参加をより求めるようにする。高齢者の生徒に対する印象が，「いざとなったら助けてくれる」存在に変われば，公園で遊んでいてもクレームを言われづらいのではないかと思う。

・高齢者の方たちと共に，公園の清掃活動を通して，問題になっていることを共有してみる。騒いでよい時間を区切ってみることで，双方で妥協点を見つけ出す。学校に集まって，ラジオ体操をして交流を図る。

・地域の高齢者の方々に子ども達が昔遊びを教えてもらい共に遊ぶといった場を設けるなどいいのではないだろうか。実際自分の小学校でもそういった取り組みがあり，ベーゴマからめんこ，凧作りなど一緒にやった記憶がある。一緒に遊んだ人のことは忘れないし，挨拶しあう関係になったのを覚えている。

・私が以前住んでいた団地では，団地の自治体がお祭りを開いて，屋台を出したり催し物をすることにより，子どもと大人の触れ合いの場を増やすような活動をしていた。また，管理事務所の横に誰でも使えるようなフリースペースがあり，そこでさまざまなイベントが行われていた。そのためなのか，あまりトラブルがないように感じた。例えば，公園にフリースペースを設置して，話しても音が外に漏れないようにすることや，上記の大人と子どもが関わる機会を増やすことが大切であると思う。

以上のアイディアのほとんどは，かつて都市部でも存在した地域活動である。例えば公園の清掃活動を一緒にする，といった小さな取り組みの積み重ねが，実は地域の見守りや大人と思春期年代の安心感と信頼感を育んでいたりする。そのことに改めて注目する必要がある。

本稿で明らかになったように，それらが失われている現在の社会状況が，思春期年代の放課後の居場所や外遊び環境の在り方にも深く関与していることに気づくとき，これからの公園が地域コミュニティ再生にかかわる“地域の居場所”として重要な意味を持っているといえるだろう。

補注及び引用文献

1）本調査は児童・生徒へのアンケート調査の他，公園の定点観察記録と近隣住民へのヒアリング調査，放課後子ども教室スタッフ・保護者へアンケートとヒアリング調査等 5 種類の調査を組み合わせて行っている。結果は総務省行政評価局（2021）：子どもの居場所に関する調査報告書－子どもの視点から見た公園の現状と今後に向けた提言－，ならびに同省同局（2021）：別冊　子どもの居場所に関する調査報告書（自由記述抜粋）放課後の居場所　公園をめぐる子どもたちの声，としてまとめ，総務省 HP 上で公開している。

2）例えば株式会社バンダイ（2018）：小中学生の“遊び”に関する意識調査，さわやか福祉財団（2011）：放課後の遊びについてのアンケート調査など。

3）第 11 期神奈川県生涯学習審議会専門部会（2014）：神奈川県における放課後の子どもの居場所づくりに向けた実態調査研究調査報告書